論 文 の 要 約

ふりがな 氏　　名	きち　けい 吉　慶
論 文 題 目	『山上宗二記』における茶湯思想に関する研究

論文の要旨

『山上宗二記』（1586 年成立）は、千利休（1522-1591）の高弟・山上宗二（1544 - 1590）によって書かれ、茶湯の思想を広く反映する基礎史料 とされる。その内容は、大きく（一）茶湯の歴史（起源）、（二）茶湯の実態と茶人論、（三）道具、（四）茶人の心構え、（五）茶湯の思想の五つに分けられる。『山上宗二記』は茶人として著名な山上宗二自身の言葉で道具論・茶人論・茶湯の思想が語られる点で、宗二特有の物の見方を知ることができ、この著作を通じて中世の茶湯思想の一つの傾向を伺い知ることができる。ただ、先行研究を通覧するかぎり、宗二や本著作に関する歴史学や文献学の立場からの研究がほとんどといえる 。しかも、そこでなされる実証的研究は表層的な事実の記述に留まり、宗二の言葉に表れる精神の息吹と深遠な思想体系を理解し、体系づけることはできない。本研究はそうした手つかずの精神領域に踏み込み、宗二の思想構造を明らかにすることを課題とする。具体的には、本研究は以下の五つの章に分けて考察を進めていく。

第一章では、『山上宗二記』における宗二の『論語』（「為政第二」）理解に焦点を当て、彼が考える茶人の稽古論を浮き彫りにする。これまで、『山上宗二記』における『論語』の役割を探求し、茶人の稽古の理念に焦点を当てた研究は少なく、本考察はそれを補う点で意義を有する。具体的に、本章では、師弟関係に着目し、茶人の実践が 15 歳から 70 歳に至るまでの各年齢段階でどのように展開されるか、そして稽古の主体がどのように変化するかを解明する。同時に、『山上宗二記』における宗二の『論語』解釈を通じて、彼の稽古・修行思想における『論語』の意義や役割を明らかにする。

第二章では、『山上宗二記』で説かれる「茶湯の起源」に関して論述する。この課題について、先行研究では主に歴史学の立場から行われてきたが、宗二の言葉とその背後にある思想に焦点を当てた研究はほとんどない。本章では、まず、宗二が説く茶湯の歴史を分析することで、「遊興」が「楽道」としての茶湯に発展する過程を描出し、次に、彼の思想面に光を当てるべく、そうした見方の背後にある「楽道」の性格と芸術思想を解明する。

第三章では、『山上宗二記』に示される「茶湯の道」を考察する。本章では、「道」という言葉が 13 回使用され、これが「茶道」という概念の形成に大きな影響を与えていることが分かる。しかし、先行研究では、「道」の哲学的側面についての考察が不十分である。そこで、本章では、「道」に関わる「一道」「楽道」「御数寄道」「此道之奥之奥」に着目し、その用例を分析し、その概念を詳細に定義することを試みる。第四章では、従来、『山上宗二記』における「師匠」の思想、とりわけ師匠の渡世（職業）論について考究する。先行研究において、師匠は、初心者に茶湯の技能を教える師という意味で「茶湯の指導者」と解釈される場合がほとんどである。しかし、筆者の見解では、「師匠」を単に技能の教師として捉えるのは不十分であり、技能を導く深い精神性への注目が必要と思われる。それゆえ、本章では、茶人の心構えを示す「又十体の九」のテキストに基づき、茶湯の道における師匠の心得の内実を解明する。

第五章においては、第四章に続き、これまでほとんど先行研究で考察されていない「十体」「又十体」という初心者に教示する茶人の心得に「思想面」から光を当て、思想の核に置かれる、修行の心・創意・粗相の規則という三要素を明らかにする。

備考　要旨は，日本語 4,000 字以内又は英語 1,500 ワード以内とする。